

近代の漢学

樋口 浩造

日本の近代にとって儒学とは何だったのかという問いが、あるいは逆転して、儒学にとっての近代とはいかなるものであったのか、という問いが思想史研究者の間で繰り返し議論され、今日では一定の厚みを持つて研究の蓄積をなしてきたと考えられる。近代の儒学を考えることとは、九〇年代のバブリーな日本を反映した漢字文化圏論のような議論を含みつつも、東アジアに共有される儒教文化の検討として、開かれた議論を呼び込む視点をともなってきたと指摘できるであろう。

では、このシンポジウムで掲げた「近代の漢学」が志向するものとは何であろうか。狭義に捉えるとき、「漢学」とは、澤井啓一氏の言葉を借りれば、「幕末に昌平黌や各地の藩校などで教えたり学んだりした経験を持つ人々を始めとして、明治以降に大学の漢学科や民間の漢学塾などで学んだ人々の学問・思想のこと」とされている。狭義という言い方は誤りかもしれず、むしろこれが通説と言っていいだろう。大会委員の間で近代の儒教とするか漢学とするかは迷いのあるところだった。儒教とすることで、この百年あまりを通史的に考察できる可能性があるのに対して、漢学は主に明治期という時代的に限定された用語として考えられるからである。あるいは、漢学という言葉自体にすでに和漢（日中）を分かち日本に閉じた問題関心が想定されており、

これまでの東アジアに開かれた研究蓄積を揺り戻すものになりはしないかとの危惧も多少なりとも存在した。

しかし、儒教に限定されない、様々な漢字文化から生まれた知を網羅する言葉として、漢学の語をあえて選択することとした。学問的には正確さを欠く表現かもしれないが、近代日本が漢字文化をどのように受け止め、利用し、思考に役立ててきたのかを、広く探ることを前提とした用語であることをご理解いただきたい。最新の西洋思想を理解可能な翻訳語に置き換えていくために漢字は用いられたし、一方で、哲学的な思考体系をもった儒学は、明治以後道徳の問題に限定され、修身を始めとする教育的言説として国民道徳形成の課題を担うことにもなる。このように考えると、翻訳語に触れ、道徳教育を受け、江戸期とは異なる広範な人々に漢学が、一般性を帯びて普及していくことを跡づけることも可能かもしれない。あるいはまた、漢文訓読法という翻訳の技法は、東アジアの国々との知的交流を活性化させる有力な手段として機能したことは注目に値するし、このことが同時に、日本が帝国化していくとき、「同種同文の国」である対アジアへの支配の欲望と絡まり合うものであることも見逃してはならないだろう。かたや、中国古典研究としての漢学は、対面する現実の中国理解を導き出すものとして時代に関与しただろうし、同時に多くの知識人の教養として存在した漢学的素養は、対西洋理解に向けての自前の武器であったと見なすこともできるだろう。こうした多様な展開として、「漢学」を捉え、近代日本における問題を「漢学」を通じて照射していけたらと考えた。

また、狭義の「漢学」に限定すれば、ジェンダーの問題が必然的に生じてくることも付言しておきたい。漢詩は男性の詩である。男性の模範が軍人像にとられる時代であって、「漢学」は帝国男子の男性性と不可分の問題として考察される必要があるのではないだろうか。こうしたジェンダーの視点からの研究は、日本思想史研究において、いまだ不十分であり、今後の充実が期待されよう。

シンポジウムは、岩手大学農業教育資料館において、中野目徹氏、中村安宏氏の司会のもと、吉田公平氏とゲストとして齋藤希史氏にご報告をいただき、そのち澤井啓一氏と大久保健晴氏にコメントを頂いた。